

転生王子 は TENSEIOJIHA DARAKETAI
タラけたい
21



朝比奈 和

Asahina Nagomu



ライラ
商家の娘で、レイの幼なじみ。商魂たくましい。

アリス
フィルの幼なじみ。賢くて機転が利く。

サイド
ディリア王立学校の生徒。真面目な性格で面倒見がいい。

トーマ
フィルの同級生。マイペースで動物好き。

レイ
女性好きで少し残念な、フィルの同級生。

フィルの仲間たち



ヒスイ

ホタル

コハク

デンガ

ザクロ

ルリ

ランドウ



コクヨウ
ディアロスと呼ばれ、恐れられる伝承の獣。見た目に反して大の甘党。

ヘテイロス
大地の王と呼ばれる大蛇で、大陸を渡り歩く伝承の獣。コクヨウの昔なじみ。

シルバーファング
フィルが森で出会ったジャガー。甘えん坊。

カイル・グラバー
クールな美形少年。闇の妖精に好かれる蝙蝠の獣人。

フィル・グレスハート
いほのせはると
大学生・ユノ瀬陽翔が転生した本編の主人公。目立たずにタラタラ過ごすのが夢。

1

俺——フィル・グレスハートはグレスハート王国の第三王子。

ステア王国のステア王立学校中等部に通う学生だ。

学校では王子という身分を隠し、鉱石屋の息子フィル・テイラと名乗っている。

只今、ステア王立学校は夏休み。

俺は友人のカイルとレイとトーマ、アリスとライラと一緒に、ティリア王室の別荘に滞在していた。

ステアの隣国ティリア王国には、長姉のステラ姉さんが嫁いでおり、皇太子妃となっている。

以前からそんな彼女に、「友達を連れて遊びに来て」と誘われていた。

先ほどの友人たちは俺の素性を知っているし、ステラ姉さんとも面識がある。

それで、夏休みの間、皆でお世話になることにしたのだ。

別荘にはティリア王国皇太子のアンリ義兄さんもいて、温かく迎えてくれた。

ここに来る前に宿題はだいたい終わらせてきたから、俺たちは毎日遊びまくっている。

皆で流しそうめんをやったり、城下町を観光したり、新しくできたテーマパーク——ティリアパークを訪れたり。

そうして、別荘で過ごすこと数週間。夏休みの半分が終わっていた。友達や家族と過ごす楽しい時間って、なんでこんなにあつという間なのかなあ。だけど、まだまだ予定は詰まっている。残りの夏休みも遊び倒すぞ！

今日は、友人たちとアンリ義兄さん、ステラ姉さんと一緒に別荘近くの森を訪れていた。森の中にある川で、これからピクニックがてら川遊びをする予定なのである。

八人乗りのホロ馬車で目的地に向かいながら、アンリ義兄さんが話す。

「今、向かっている川は水深が浅く、流れがゆるやかなんです。子供が水遊びをするのにちょうどいい場所ですよ。私も子供の頃、よく遊びに来ていました」

「アンリ様が水遊びを？」

初めて聞く話だったのか、ステラ姉さんが尋ねた。

アンリ義兄さんはそんな妻に、優しく微笑む。

「ああ。川で魚を釣ったり、水遊びをして涼んだりしていたよ」

へえ、アンリ義兄さんも、川で水遊びとかやっていたんだなあ。

幼い頃から刺繍や編みものを趣味にしていたと聞いていたから、てっきりインドア派かと思っていた。

「フィル殿下たちも、きつとお楽しみいただける場所だと思います」

その言葉に、俺の期待はますます高まる。

「川遊びは久しぶりなので、とても楽しみです」

グレスハートにいた頃は、カイルと一緒によく川遊びをしたものだ。

特にカイルは、水遊びが好きだから嬉しいだろうな。

そう思って俺が顔を向けると、彼は微笑した。

「フィル様、楽しみですね。グラント大陸ではドルガド王国の温かい泉に何度か浸かったことはありますが、湖や川には入ったことがありませんでしたから」

ドルガド王国の森の中にある自然温泉は、帰省の行き帰りで時間があれば寄る場所だ。

「そうだね。冷たい湖や川では、まだないよね」

湖や川に行くことはあっても、水に浸かるまではしないからな。

すると、レイが扇子で自分を扇ぎながら言う。

「今日は暑いから、早く川に飛び込みたいよ」

「僕も冷たい水で涼みたい」

トーマもそう言って、ハンカチで顔の汗を拭う。

確かに、今日は特に気温が高いもんね。

「私はフィルが考案した、水着というものが気になっているわ」

「ええ、私も！ 早く着て、試してみたい！」

アリスとライラはワクワクした様子だ。

今回俺は、川遊びのために子供用の水着を用意していた。

こちらの世界には、水着というものがない。

代わりに使われているのが、沐浴着である。

沐浴着は、その名前の通り、沐浴で使用する服だ。浴衣タイプと、洋服タイプがある。

生地は厚いがさほど水は吸わないので重くならず、濡れても透けず、水の通りもいいから動きやすい。

ただ、あくまでも沐浴用なので、泳いだり、水中で体を動かしたりするには向いていない。

布が体にまとわりつくため、どうしても水の抵抗を受けてしまうのだ。

だから、いつかは水着を作りたいと思っていた。

「構想はあったけど、水着に適した素材がなかなか見つからなくて、ちょっと諦めていたんだよね。まさか今回の川遊びで、披露できるとは思っていなかったなあ」

しみじみと呟く俺に、レイが問う。

「水着の素材には、ミネルオーの毛玉を使うことにしたんだろ？」

俺はにこっと笑って、コクリと頷く。

「そう。この前、婆様から新しく毛玉をもらったから。それを使って作ったんだ」

ミネルオーとはステア王国南西の遺跡に棲む動物で、婆様はその長老だ。

白いモルモットのような体形で、龍のような鬘と尻尾を持っている。

ミネルオーは仲良くなると、自分たちの毛玉を友好の証としてくれるんだよね。

俺は婆様から、すでに何個か毛玉をもらっている。

ミネルオーと初めて出会った時と、ルーゼリア義姉さんのウエディングボールの素材を探していた時。

それから、先日アルメティ神殿へ行って、婆様を伝説の鳥アルメテロスに会わせてあげた時だ。

会わせてくれたお礼にと、婆様は毛玉をくれた。

ミネルオーの毛玉は稀少なものなのに、ありがたいよね。

「ミネルオーの毛は軽くて、水を弾く特性がある。それから、糸にすると伸縮性もあるでしょ。だから、水着の素材に使えるかもって思ったんだ」

ボール作りの時は気づかなかったけど、まさに探し求めていた素材だったのだ。

トーマは「ふむふむ」と頷く。

「ミネルオーは泳ぎが得意な動物だもんね。そんなミネルオーの毛は素材として、最適だと思う」「沐浴着とは形も違うのか？ どんな感じなんだ？」

身を乗り出して質問するレイに、俺は傍らに置いていた鞆を探る。

「もうすぐ川に着くし、見てもらったほうがいいかな」

カイルは水着の開発中に一緒に行動していたから知っているけど、他の皆はまだ実物を見てないもんね。

俺は鞆から、水着を取り出した。

アリスとライラとトーマとレイが興味深そうに覗き込む。

「これが水着なのね」

「確かに伸縮性がありそう」

「わあ、かつこいいなあ」

「うん。でも、結構生地が厚くないか？」

レイの指摘通り、実は前世の水着よりも生地は厚い。

「ミネラルの毛の特性を活かすために、わざと厚くしているんだ。水に入った時に浮力がつくから、沈みにくくしてくれるんだよ。あと体温も下がりにくくなるし」

俺の説明に、ライラとレイとトーマとアリスは驚嘆の声を漏らす。

「浮力がつく!？」

「溺れにくくなるってことか？」

「冷たい水に浸かってても、体温が下がりにくくなるんだ？」

「それはすごいわね」

そんな皆の様子を見て、カイルが驚くのも無理はないといった表情で頷いている。

素材の特性を活かすため、水着はウェットスーツのような形にした。

男子用はトップスは五分袖、ボトムスはひざ丈。

アリスとライラ用はボトムスにプラスして、丈の短いスカートがついている。

メインカラーは黒で統一しつつ、袖やラインなどには、個々に違う色をアクセントとして加えた。

俺は水色、カイルはグレー、レイは緑、トーマは黄色、ライラはオレンジ、アリスはピンクだ。

それぞれに水着を渡すと、皆は「ありがとう!」とお礼を言っ顔を綻はせる。

ライラが水着を観察しながら感嘆する。

「縫製が素晴らしいわ。もしかして、開発はティリアの縫製職人の方と？」

俺は「そう」と短く答えて、アンリ義兄さんに視線を向けた。

「アンリ義兄さまにご相談したんだ。アンリ義兄さまもアイデアに興味を示されて、水着開発のチームを作ってくださいだったんだよ」

水着作りを相談したのは、俺たちがティリアの別荘に到着してから。

アンリ義兄さん自ら、水着開発チームの統括を務めてくれた。

そんな彼が俺に向かって微笑む。

「沐浴に代わるものを開発しようなど、今まで考えたことはありませんでしたから。水着の共同開発はとても楽しかったです。フィル殿下のアイデアはとても刺激的で、いい勉強になりました」

優しい言葉に、俺はペコリと頭を下げる。

「協力してくださいだったことはもちろんですが、今日の川遊びまでに間に合わせていただいております」

製作期間は短いし、アンリ義兄さんも忙しいだろうから、正直言えば、川遊びまでに完成するとは思っていなかった。

ステラ姉さんによると、彼は睡眠時間を削って間に合わせてくれたらしい。

俺が感謝を述べると、アンリ義兄さんは笑みを深くした。

「開発が楽しくて夢中になつていたら、いつの間にか完成してただけなので、気にしないでください」

そう言ったアンリ義兄さんは、レイたちを見回して告げる。

「どんな些細な感想でもいいから、着心地をあとで教えてほしい」

レイたちは水着を大事そうに抱えて、「はい！」と元気に返事した。

しばらくすると、川のせせらぎの音がだんだん大きくなってきた。

水の流れる音って、聞いていると癒やされるし、涼やかだよなあ。

実際、先ほどよりあたりの気温が下がっているように感じる。

もうすぐ目的地なのかもしれない。

ややして、馬車は開けた河原のそばに停車した。

「到着しましたね。では、降りましょう」

アンリ義兄さんに促されて、俺たちは馬車を降りる。

停車したあたりは砂利混じりの土で、ところどころに草が生えていた。

平らな場所もあるから、テントを設営するのも良さそうだ。

今からここに、更衣室を兼ねた休憩用のテントを二つ設置してくれるらしい。

その作業が終わるまで、俺は簡単に水着の着方を教えようかな。

開発時に一緒に行動していたカイルはわかるけど、他の皆は知らないもんね。

俺は水着を見せて、皆に説明する。

「水着は上下に分かれているから、着方は洋服と変わらないよ。沐浴着よりも体にフィットするから、初めは少し変に感じたり、窮屈さを覚えたりするかもしれない。もしわからないことがあったら、レイとトーマは僕に聞いてね。アリスとライラはメイドさんが手伝ってくれるから安心して」

彼女たちの補助をしてくれるメイドさんには、事前に着方を伝授している。

俺の説明に、アリスとライラはホツとした顔で微笑んだ。

「ありがとう。フィル」

「わからなかったら、聞くわ」

ちょうどその時、テントができたと声をかけられたので、男女二手に分かれて着替えに向かう。

テントの中には、試着室が二つ設けられていた。

まず俺とカイルが先に入って着替え、同じタイミングで試着室を出る。

水着に着替えた俺とカイルを見て、トーマとレイが「わぁ」と感嘆の声を漏らす。

「すごい！ 着るとそんな感じになるんだねえ」

「おー！ 二人ともいいじゃん！」

トーマたちの賛辞に、俺はにっこり笑う。

「ありがとう。二人も着ておいでよ」

そう促すと、レイは試着室のカーテンを勢よく開けた。

「よーし！ 俺も着替えるぞー！」

「わわっ！ 僕も着替えてくる！」

トーマも慌てて、もう一つの試着室へ入る。

二人を見送ると、俺は改めてカイルを見る。

「カイル、似合ってるね」

サーファーみたいでカッコいい。

「ありがとうございます。体にフィットして、動きやすいです」

カイルはそう言いながら、腕を上げたり体を捻ったりしている。

「うん、動きやすいよね」

ミネルオーの毛で作った水着は、前世の一般的な水着よりほんの少し生地が厚い。

生地が厚いと透ける心配はなくなるものの、脇周りなどが少しもたついてしまう。

着心地が悪くなるし、動きづらくもなるんだよね。

開発で特に苦労した部分だ。

だけど、今着ている水着は、生地のたるみなどが一切ない。

こんなに体にフィットしているのは、アンリ義兄さんたちティリアの縫製職人の優れた技術力のおかげだろう。

彼らの苦労に思いを馳せていると、レイとトーマが試着室から出てきた。

「じゃーん！ どうよ」

レイがポーズを決める一方で、トーマは自信なさそうに俺に聞く。

「僕、着方……これで合ってる？」

俺は笑顔で頷いた。

「うんうん。二人ともカッコいいよ」

そう太鼓判を押すと、レイは得意満面になり、トーマは安堵の表情を浮かべる。

「本当に水着って、ピタリフィットなのな！」

「うん。フィルが言っていた通りだね」

二人は水着を揃まみながら言う。

「水の抵抗を受けないから、泳いだりしやすいんだよ。水を少し取り込むことで、保温の効果も出てくるし」

俺の説明に、二人は「へえ〜」と感心する。

その時、テントの外からアリスとライラの声がした。

「あ……あの、着替え終わった？」

「こっちは終わったんだけど……」

俺たちがテントを出ると、水着姿の二人が立っていた。

ライラとアリスは恥ずかしいのか、薄い上着を羽織っている。

「初めて着るものだから、落ち着かないわ」

「に、似合ってるかしら？」

おずおずと聞いてくる二人に、俺は微笑した。

「うん、似合っているよ。とても可愛い」

素直に感想を述べると、二人は「良かった」とはにかむ。

「今は着慣れないかもしれないけど、水に浸かったらその性能がわかると思うよ」
俺の言葉にライラの目が輝く。

「それは楽しみだわ！」

そんな会話をしているところへ、アンリ義兄さんと日傘をさしたステラ姉さんがやって来た。

「着替え終わったんですね」

「それが水着なんですね。皆お揃いで、とても可愛らしいです」

ステラ姉さんに褒められ、俺たちは顔を見合わせて笑う。

アンリ義兄さんが真剣な顔でこちらを見つめた。

「サイズは合っているようですね。生地のためはなさそうですが、着心地はいかがですか？ どこか突っ張るとか、動きにくいとか、ありますか？」

おおう、質問攻め。

レイが屈伸運動をしながら答える。

「動きやすいです！」

俺もそれに続いて、コクリと頷く。

「とても着心地がいいです。性能に関しては、水に入ってみてからですね」

「感想お待ちしています」

アンリ義兄さんは俺の手を取り、両手でぎゅっと握る。

握る力の強さから、水着開発にかけた情熱が伝わってきた。

ステラ姉さんは俺たち一人一人の顔を見て、注意を促す。

「川に入る時は、気をつけてくださいね。浅い場所でも、溺れることがあると聞きますから」

俺たちを心配しているようだ。

この水着は浮力があるので、溺れにくい。

それに、いろいろ安全対策のグッズも持ってきている。

でも、ステラ姉さんの言うように、水辺では何が起こるかわからないのも確かだもんね。

俺は安心させるべく、ステラ姉さんに笑ってみせた。

「はい。充分に気をつけます」

そんな俺に、アンリ義兄さんは優しく言葉をかける。

「何かあればすぐに助けに行けるよう、護衛の者が岸辺に控えております。お昼まで存分に遊んで来てください」

俺たちは元気な声で「はい！」と返事をした。

俺たちは護衛の人たちと一緒に、川のそばへやって来た。

先ほどまで地面は砂利混じりの土だったが、ここは丸い小石が敷き詰められている。

馬車の中で聞いた通り、流れはゆるやかだ。川幅が広いし、水深も膝くらいかな。

川の水は透き通り、日の光を反射した水面がキラキラしている。
「綺麗どころだなあ」

感嘆する俺に、アリスも同意する。

「ええ、素敵な場所ね」

川を覗き込んでいたカイルが、水中を指さした。

「フィル様、小魚が泳いでいますよ」

その場所を、皆で覗き込む。

透明度が高いので、水中を泳ぐ小魚の群れがよく見える。

三センチほどの大きさの、虹色のうろこを持つ魚だ。

「わあ、本当だ。綺麗だね」

「可愛い小魚ね」

「なんて名前の魚かしら？」

俺とアリスとライラが話していると、トーマが教えてくれる。

「多分、ナギノメじゃないかな。あれで最大まで成長したサイズだよ。水が綺麗なところにしかない魚なんだ」

トーマが動物マニアであることは知っていたが、魚にも詳しいのか。

感心していると、魚をじっと見ていたレイがボソッと呟いた。

「あれで最大かあ。食べられるのかな？」

それを聞いて、ライラは信じられないという表情でレイを見た。

「あの綺麗な小魚を見て、言うことがそれ？」

「いや、だって、アンリ皇太子殿下が川で魚釣りをしていたっておっしゃっていたからさあ」

頭を掻くレイに、カイルが小さく息を吐く。

「普通、釣るならもっと大きな魚を狙うだろう」

「ああ、そっか。じゃあ、大きいのもいるのかな？」

レイはキョロキョロとあたりを見回す。

そんな彼に向かって、俺は教える。

「魚は石とか水草の陰に隠れて、身を休めるんだ。こちら辺は、大きい魚が隠れるような場所がないから近くにはいないと思うよ」

トーマも俺の推測に頷く。

「そうだね。いるとしたら向こうの岩場じゃない？」

俺たちがいる河原の対岸には、大きな岩場があった。

トーマの言う通り、あのあたりなら大きな魚が潜んでいそうだ。

それを聞いたレイがパアッと笑顔になる。

「じゃあ、あっち行ってみようぜ！」

するとカイルの手がぬっと伸びて、川に入ろうとしたレイの水着の襟首を掴んだ。

「ぐえこっ！」

レイの口から蛙みたいな声が漏れた。

「準備もなく、いきなり川に入るな」

カイルはレイを見下ろして睨む。

俺は「うんうん」と、相槌を打った。

「ステラ姉さまにも言われたでしょ。水辺は充分に気をつけなきゃ」

レイはハツとして、真面目な顔で呟く。

「そうだよな。気をつけるって、ステラ妃殿下と約束したもんな」

素直に反省するレイの肩を、俺はボンと叩いた。

「さあ、水に入る前に準備体操をしよう」

俺たちは輪になって準備体操を始めた。

いくら浅瀬だって、川遊びは油断してはならない。

足がつって転んだら浅瀬でも溺れることがあるからね。

屈伸に前屈、アキレス腱伸ばしや上体そらし、背伸びに腕回し……。

前世でも、プールに入る前にこうやって準備体操していたなあ。

体が温まって、だんだんほぐれていくのがわかる。

額に少し汗が滲んできたところで、俺は皆に声をかけた。

「体操はこれくらいでいいと思う」

俺の言葉に、レイは満面の笑みを浮かべた。

「やった！　じゃあ、もう川に入ってもいいんだな！」

川に向かおうとするレイを、俺は慌てて呼び止める。

「あ、ちょっと待ってレイ」

「……まだ何かあるのかよお」

レイは少々うんざりした顔で振り返った。

再び川に入るのを止められて、嫌気がさしているようだ。

「そんな顔しないで。いいものを用意したんだよ」

「え！　いいもの!？」

さっきまでの不満顔が嘘のように食いついてきた。

「うん。川遊びに使うものなんだ」

俺は河原に持ってきた鞆の中から、折りたたんだ革製品を六つ取り出した。

皆が不思議そうに手元を覗き込んでくる。

「なんだ？　ペラペラしてるけど……」

「何、これ」

レイとトーマは首を傾げ、ライラはじっと観察しながら呟く。

「これ、もしかしてノビトカゲの皮？」

さすがライラ。すぐに素材に気がついたか。

俺はにこっと笑って肯定する。

「そう。中型のノビトカゲの皮を縫い合わせて作ったものだよ」
ノビトカゲは、グレスハートに生息しているトカゲである。

脱皮を繰り返しながら、手のひらサイズから数メートルにも成長する長寿な生き物だ。

ノビトカゲの脱皮した皮はゴムのような伸縮性と弾力を持ち、耐久性にも優れているんだよね。
グレスハートではその皮を利用して、様々な商品を作っている。

ベルトやバッグ、靴底の滑り止め、馬車やキャリーケースのタイヤ、長靴や手袋などなど。
ノビトカゲの年齢によって皮の厚みが違うから、皮ごとに商品のバリエーションは豊富だ。
今回は、そんなノビトカゲ製品の新作になる。

「これは、うきわって言うんだ」

俺はそう言っつて、空気の入っていないペラペラのうきわを掲げた。

「「「うきわ？」」」

レイとトーマとライラとアリスが、同時に聞き返してくる。

こちらの世界では、前世にあったドーナツツ型のうきわがまだないんだよね。

浮力の補助具として使われているのは、羊や牛の皮で作った浮き袋が定番だ。

大きな川を渡る時は、それを腰に巻いて使う。

「形は違うけど、用途は浮き袋と同じだよ。中に空気を入れて膨らませ、泳ぐ時の補助具として使
うんだ」

説明する横で、カイルがうきわの空気を膨らませてくれる。

肺活量がすごいのか、あつという間にパンパンに空気の詰まったうきわが二つ出来上がった。

「おおお！ 輪っかだ！」

レイが驚嘆し、ライラはワクワクした顔で聞く。

「このうきわは、浮き袋と同じ使い方をすればいいの？」

俺はジェスチャーを交えながら、質問に答える。

「ううん。これは腕で抱えたり、輪の中に体を通したりして使うんだよ」

カイルは「ほら」と、出来上がったうきわをアリスとライラに渡す。

「わあ！ ありがとう、カイル」

「このうきわは、浮き袋よりも浮きそうね」

ライラがうきわの表面をポムポムと叩く。

それを聞いてトーマは嬉しそうだ。

「これがあれば溺れる心配もなさそうだね。僕、あまり泳ぎが得意なほうじゃないから助かるな」

「溺れるどころか、ぶかぶか浮きながら川の流れに乗れるんじゃないか？」

うきわを見つめてニヤリと笑うレイに、ライラはため息を吐く。

「危ないわよ。そのまま流されたらどうするの」

「大丈夫だろ。ここは流れもゆるやかだし、深くないんだから。危なくなったらすぐ立てばいいん
だよ」

樂觀視するレイに俺は苦笑する。

「川の流れに乗って遊ぶ時は、うきわに紐を縛りつけて、どこかに固定したほうがいいかもね。気がついたら下流まで来てしまったなんてこともあるし、いざ立とうと思ったたらそだけ深い窪みになっっている可能性もあるからね」

カイルは真顔で、レイにぐっと顔を近づけた。

「このうきわは浮力がある。体重をかけて無理に水に沈めようとすると、浮き袋より反発が大きいらしい。正しい使い方をする分には問題ないが、ふざけすぎるとバランスを崩すからね」

庄のある顔で忠告され、レイはコクコクと頷いた。

「や、やらない。約束する。安全第一で遊ぶ！」

そう宣言すると、カイルに向かってそっと両手を差し出す。

「なので、俺にもうきわを……」

カイルは小さく息を吐いて、出来上がったうきわを渡した。

俺はそのやり取りにくすつと笑う。

「皆、気をつけて遊ぼうね」

2

残りのうきわを膨らませて、俺たちはようやく川へ入った。

水底にある石は大きさや形がバラバラだし、水草や苔で結構滑るな。

俺は転ばないように、気をつけて歩く。

思っていたよりも、川の水はひんやり冷たかった。

太陽の日差して体が火照っているから、余計に冷たく感じるのだろうか。

「わははは！ 冷たくて気持ちいいー！」

うきわを抱えたレイが、勢いよくザブンとしゃがみ込む。

「わ！ 冷たっ！」

水飛沫が飛んできて、俺は声を上げる。

「暑い日の川遊びは最高だな！」

うきわに掴まりながら、レイが笑う。

「うん。川遊びはいいねえ」

トーマはのほほんとした口調で返した。

「水の冷たさが、水着の部分だけ軽減されているわ。やっぱり沐浴着と全然違うのね」

感心した様子のライラにアリスが頷く。

「本当ね。もし沐浴着なら、素肌と変わらない冷たさのはずよ」

それを聞いて、俺も屈んで腰まで川に浸かってみる。

初めはヒヤツとしたが、確かに素肌の部分より冷たさを感じない。

水着の保温効果のおかげだろう。

ライラは自分が着ている水着を見下ろして、悔しそうな顔をした。

「この水着、絶対に皆欲しがらるの……。どうして、ミネルオーの毛が材料なののお」
嘆くライラに俺は苦笑する。

ミネルオーの毛は稀少だからなあ。

もう何着か作ることができて、これを商品化することは難しい。

「商品として売り出すなら、似た材料を探すしかないかなあ。多分、性能は落ちると思うけど……」
俺の言葉に、ライラはしょんぼりと肩を落とす。

「性能が落ちちゃうのかあ」

こればかりは仕方ない。

ミネルオーの毛ほど最適な材料は、なかなか見つからないだろうから。

「なら、このうきわは？ 商品にしないのか？」

うきわに掴まりながらレイが聞く。

俺のアドバイスを受け、レイはうきわが流されないように大きな岩と紐で結んでいる。

今は川の流れに身を任せ、うきわに乗ってぶかぶか浮いており、とても気持ち良さそうだ。

「うきわは商品として売り出す予定だよ。まあ、材料のノビトカゲの皮の在庫数に限度があるから、数量は少なめになると思うけど」

うきわに使用している皮は、中型のノビトカゲのものだ。

中型の大きさの子は、頭数がまだ少ないんだよね。

一年のうちに脱皮できる回数も限られているので、どうしても採れる量が少なくなる。

「職人さんたちも頑張ってはくれているんだけどね」

職人を増やし、工場も増やしたが、それでも供給が追いつかない状況だ。

肩をすくめる俺にアリスは苦笑する。

「最近、ノビトカゲの商品は国内外で人気らしいものね」

ライラも大きな声で肯定する。

「そうそう。今、すごく人気なのよ。アルフォンス皇太子殿下の結婚式でグレスハートを訪れた観光客たちが、ノビトカゲ製品を買って、徐々に素晴らしさが広まってきているみたい。うちの商会にも、手に入らないかって問い合わせが相次いでいるわ」

「そ、そうなんだ？」

俺は口元を引きつらせた。

困ったなあ。販売数を増やしたいけど、皮の在庫はどうにもならないしなあ。

俺が唸っていると、アリスがくすつと笑う。

「今は川遊びに来ているんだから、その話はあとでもいいんじゃない？」

そう言われてハッとす。

「それもそうだね。じゃあ、僕もうきわで遊ぼうかな」

俺はうきわの紐を近場にある大きな岩に括りつけ、川を遡って上流に移動する。

それから、うきわに身を預けて、そっと足を浮かせた。



「おお」

川の流れに乗って、うきわがゆっくりと進み始める。流れがゆるやかだから、波の影響もあんまりないな。ふふふ、なんだか流れるプールみたいだ。

「あ、これいいねえ」

適度な波の揺らぎが心地良い。

さっきまでは水が冷たかったけど、だんだん慣れて気にならなくなってきたし。ちやふちやふと揺れながら、俺は目を閉じる。

やがて岩に繋いでいた紐がピンと張って先に進まなくなったが、流れに揺られるまま、しばらくそうしていた。

川遊び最高すぎる。

夏休みを満喫してるなあ。

俺が幸せを噛みしめていると、自分にあたっていた日差しが遮られる気配がした。目を開けると、カイルが心配そうな顔で覗き込んでいる。

「あ、良かった。うきわに乗ったまま、眠ってしまったのかと思いました」

カイルの言葉に俺は小さく笑う。

「いくらなんでも、こんなところで寝ないよ」

まあ、寝そうなくらい気持ち良きはあったけど。

「いや、半分寝ている人物がいるので……」
カイルが後方を指さす。

見れば、俺と同じく紐付きのうきわに乗ったレイが、上流から流れてくるところだった。
寝そうなのか、ゆらゆらと頭を揺らしている。

うきわが紐に引かれて止まっても、彼の様子は変わらなかった。
寝ているのか、起きているのか……。

うーん、さっきの俺みたいに、気持ち良くてただ目を閉じているだけだったら別にいいんだけど、
寝そうなら起こしたほうがいいよな？

俺が声をかけるのを躊躇ちゆうちよしていると、近くにいたライラもレイの様子に気がついたらしい。
大きなため息を吐いた彼女は、レイの顔を目掛けてパシャッと水をかけた。

「うわっ！ な、なんだ!？」

水をかけられたレイは、顔を拭いながらあたりを見回す。

「うきわを使って浮いているからって、寝るんじゃないわよ」
自分を睨にらんでいるライラの言葉に、レイは状況を把握したらしい。

慌あわてて言い訳をする。

「い、いや、寝てねえよ。あんまりにも気持ち良かったから、ちよつとうとうとしただけ！」

「寝かけてるじゃない」

呆あきれ顔で言われ、レイは口を尖とがらせる。

「だって、気持ち良くてさあ」

二人の会話を聞き、アリスが口元を押さえてクスクスと笑った。

「本当に気持ち良さそうにしていたわね。そんなに快適だった？」

「すごいよ！ うきわ、最高だよ！」

レイは笑顔で答える。

俺は立ち上がって、自分が乗っていた紐付きのうきわをアリスに差し出した。

「アリスもやってみる？」

「え、フィルのうきわを借りてもいいの？」

尋ねるアリスに、俺は笑顔で頷く。

「うん。いちいち紐を結び直すの、面倒でしょ。僕のを使つてよ」

そう言うと、アリスは嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう。実はやってみたくて思っていたの。じゃあ、私のうきわと交換ね」

アリスが自分のうきわと、俺のを交換する。

俺たちのやり取りを見て、レイもライラに自分のうきわを差し出した。

「ライラもやってみるよ。俺が寝そうになる気持ち、わかるからさ！」

ライラは一瞬しゆんだけ躊躇ちゆうちよしたものの、レイのうきわを手を取った。

「わかったわ。レイみたいに寝ないとは思うけど……。どれだけ快適なのか気になるから、やってみる。行きましよう、アリス」

「ええ。じゃあ、行ってくるわね」

アリスは俺たちに向かって、小さく手を振る。

「二人とも楽しんでね」

連れ立って上流へ向かう二人に、俺はヒラヒラと手を振り返した。

「あの心地良さを体感したら、二人も絶対にはまるよな」

そう言っつて、二人の背中を見つめていたレイは、ふと思いついた顔でカイルと俺に囁く。

「……なあ、ライラがどんな顔で流れてくるか、皆で下流で待ち構えてようか？」

いたずらっぽいわみを浮かべるレイに、カイルは眉を顰める。

「悪趣味だな。やめとけ」

俺も「うんうん」と同意を示す。

「そうだよ。レイの視線が気になっちゃって、ゆったり遊べないでしょ。それに、僕はこれから作るものがあるから無理」

俺がきつぱりと断ると、レイは首を傾げる。

「作るもの？」

「うん、そう。……どのあたりに作ろうかなあ」

俺がキョロキョロとあたりを見回すと、カイルは不安そうな声で尋ねてくる。

「フィル様、ここで何かを作るとか聞いていないんですが……。いったい何をやる気ですか？」

カイルは俺がまた何かしでかすのではないかと、心配なようだ。相変わらず信用がない。

俺は安心させるように笑って答える。

「別に変なものを作ったりしないよ。召喚獣の皆に、水遊びができる場所を用意しようと思ってるだけだから」

俺の召喚獣のうち、毛玉猫のホタルや水亀のザクロ、光鶏のコハクは俺がよくお風呂に入れてい

るからか、水やお湯に浸かるのが大好きだ。

「ザクロは水深が浅いところが好きだし、ホタルやコハクは川に入れたらそのまま流されていっ

ちやいそうだからさ」

理由を話すと、カイルとレイは「なるほど」と頷く。

「水遊びの場所ですか。川よりも安全に遊べそうですね」

「ホタルやコハクは水に浮くから、確実に流されるよなあ」

しみじみと呟くレイに俺は苦笑する。

そう、ホタルやコハクは水に浮かぶ。特にホタルは、水に浮かんだ状態で、子狼の姿になったディアロスのコクヨウを頭の上に乗せられるほど浮力がある。

溺れることはまずないが、そのまま下流に流されていってしまう可能性が高い。

ホタルもコハクも丸っこいフォルムだから、紐で結ぼうにも取れちゃうだろうしなあ。

「それに、ホタルたちだけじゃなくて、ノトスやナツシユやメアリーも水浴びが好きでしょ。水遊

び場を作つてあげたら喜ぶかなと思つて」

アリスの召喚獣であるノトスは、香鳥かちどりで水浴びを好む。

ライラの召喚獣のナツシュは、ラゲールというアライグマのような見た目をした動物だ。

その見た目と同様、気に入ったものを水で洗う習性がある。

トーマの召喚獣であるメアリーは、クンという動物でオコジョのような見た目をしている。

水属性の能力を持っているからなのか、メアリーは暑さに弱い。夏はよく水浴びをさせているのだと、トーマが言っていた。

水属性の子は、暑さが苦手な傾向があるようだ。

ただ、同じ水属性でも、ザクロは自分の周囲を冷やす能力があるから暑くても平気だけどね。

「水遊び場を作ってくれたら嬉しい！」

俺たちの会話が聞こえたのか、川の中央にいたトーマがこちらにやって来た。

「メアリー、絶対に喜ぶよ！ 僕も作るの手伝う！」

トーマが手を挙げると、それに続いてカイルも挙手した。

「俺も手伝います」

「え、二人ともいいの？ わあ、ありがとう」

石を積む作業があるので、人手が多いのはありがたい。

すると、レイも小さく手を挙げた。

「俺も手伝うよ」

「え、レイも？ フラムとロイは、水遊びしないよね？」

レイの召喚獣であるロイとフラムは、水に浸かるのは好きじゃない子たちだ。

ロイは砂漠さばくを棲処すまかにしている土属性のスナザル、フラムはファイクという火属性のキツネ。

水属性の動物に暑さに弱い子が多いように、属性の関係で水が苦手な子もいるんだよね。

「水には浸からないだろうけど、二匹とも見ているのは好きだから」

見ているのは好き……？

確かに、ロイは召喚獣たちの遊びに参加するより、どちらかと言えばその様子を見ることを好んでいる。

「ロイはいつも楽しそうに見学しているからわかるけど、フラムもそうだったっけ？」

俺は首を傾げた。

フラムも遊びにはほとんど参加しない。

それは、自慢しみんの毛を汚よごしたり乱みだしたりしたくないからなんだよね。

彼の意識は常に自分の毛質に向いている。

俺の問いにレイはフツと笑う。

「好きなんだよ。水面がとてつもなく」

それを聞いて、俺とカイルとトーマは納得した。

「あ……水面か」

「そういえば、好きだったな」

「初めて出会った時も、水面を見ていたもんねえ」
フラムは鏡代わりにした湖面に映る自分の毛並みにうっとりしていたのだ。

「じゃ、じゃあ……レイにも手伝ってもらおうかな」
フラムが楽しめるのであれば、それでいい。

「で、どの辺にどういうのを作ろうと思ってるんだ？」

レイの問いに、俺は再びあたりを見回す。

「場所は、川の流れのゆるやかな浅瀬がいいんだ。あ！あの辺がいいかな」

俺は岸に近い場所を指さした。

「まず、底にあたる部分は少し窪地を作って、周りを大きな石や小さな石を組んで囲む。そうして
だいたい形ができれば、中に防水布を敷こうと思ってるんだ」

俺の説明に、トーマは「そっか」と感心の声を漏らす。

「防水布で中に水を溜めるんだね」

「うん。粘土で隙間を埋める方法もあるんだけどね。遊び終わったら元に戻す予定だし、何より簡
単だから」

ほんの少し遊ぶだけなら、その程度で充分だと思ふ。

「どのくらいのものを作るんですか？」

カイルの質問に、俺は少し考えつつ答える。

「ん、ホタルたちが入るくらいだから、そんなに大きくしなくてもいいかな」

すると、レイがすかさず手を挙げた。

「中に使う防水布って、小さいのしか用意してないのか？」

「ううん、いろんなサイズを持つてきてるよ」

防水布は地面に敷けばシートになるし、天幕のように張れば日除けや雨除けになるし、木と木の
間に結んでハンモックにもできる。

いろいろな用途に使うことができるので、こうしたアウトドアには必需品だ。

そのため、今日は大・中・小と様々なサイズを用意してきた。

俺の返答を聞いて、レイは笑顔になった。

「じゃあ、俺たちも入れるような大きさにしないか？ 階段状にザクロやコハクが遊べる深さと、
ホタルや俺たちが浸かれる深さの二種類を作ってさ」

「え、僕らも入れる大きさ？」

聞き返す俺に、レイはコクコクと頷く。

「楽しそうじゃん。フィルだってホタルたちと一緒に入りたいだろ？」

そりゃあ、一緒に入りたいかと聞かれたら入りたいに決まっている。

「入りたいけど、でもなあ」

俺が難色を示すと、レイは不思議そうな顔で聞く。

「大きいサイズの防水布はあるんだろ？ できないのか？」

「いや、できるよ。でも範囲を大きくすると、それだけ労力も時間もかかるんだよ」

遊ぶ時間もなくなるし、作ることができたとしても、そのあと遊ぶ体力が残っているか疑問だ。レイは「そっか」と、少し残念そうな顔になる。

すると控えていた護衛の一人が、俺たちのところへやって来た。

「恐れながら、フィル殿下よろしいでしょうか」

そっと声をかけられ、俺はそちらに体を向ける。

「うん、なあに？」

俺が聞き返すと、彼は穏やかに微笑んだ。

「水遊び場を作りたいとのことでしたら、我々が作業を行いましょ」

それを聞いて、レイがバアツと顔を綻ばせる。

「うわぁ！ 本当ですか？」

素直に喜んでいるが、俺はどうしようと悩んだ。

申し出は大変嬉しい助かるのだが、それをそのまま受け入れていいものか。

「でも、護衛のお仕事があるのに、作業をお願いするわけには……」

彼らはアンリ義兄さんの命を受けて、俺たちを護衛してくれているのだ。

主人でもないのに、別の作業をお願いしてもいいものだろうか。

俺が躊躇っていると、その護衛は笑みを深めた。

「アンリ皇太子殿下からは、皆さまの護衛とともにフィル殿下の遊びのサポートもするよう、仰せ

つかっております」

「遊びのサポートも？」

俺が目を瞬かせて聞き返すと、彼は肯定する。

「アンリ皇太子殿下は『フィル殿下はいろいろなアイデアを思いつく天才だから、きっと川を泳ぐだけじゃないはずだ。何か行おうとなさっている時は助力せよ』……とおっしゃいました」

それを聞いて、カイルがアンリ義兄さんのいるテントのほうへ視線を向けた。

「フィル様の行動を読まれていますね」

レイとトーマも感嘆の息を吐く。

「ふぁー、さすがアンリ皇太子殿下」

「はぁー、すごいねえ」

俺……そんなにわかりやすいんだろうか。

しかしあらゆることを想定をして、それに対応できるように準備してくれていたなんて……。

アンリ義兄さんの気配り力は、本当に素晴らしいな。

感心している俺に、護衛が穏やかな声で話す。

「テントを張る作業が終了した者も何人かこちらに合流いたしますから、警護の任に関しても心配なさらないでください」

「どうもありがとう。じゃあ、水遊び場を作るのを手伝ってください？」

俺がお願いすると、彼とその後ろにいた護衛たちは笑顔で「はい」と返事をした。

そうして俺たちは、護衛たちの手を借りて、水遊び場作りをすることになった。彼らやカイルに比べると、俺やレイやトーマの労力は微々たるものだ。それでも、一緒に手伝った。

護衛たちは「指示を出してくれば全てこちらで行います」と申し出てくれたのだが、自分たちの遊び場所なのに完全に作業を任せるのは気が引ける。少しでも作業に加わりたかったのだ。

皆のおかげで、水遊び場はあっという間に完成した。

「できたあー！」

俺とレイとトーマは声を揃えて喜ぶ。

大きさは、直径二メートルほどの円。

小さなコハクやザクロなどが使う用の深さと、ホタルやナツシユなどが使う中くらいの子たち用の深さと、俺たちが浸かれる深さの三段階に分けている。

喜んでる俺たちのところへ、アリスとライラが二人のメイドさんと一緒にやって来た。

出来上がった水遊び場を見て、ライラとアリスは驚く。

「え、もう終わったの？」

「休憩してもらおうと思って、持ってきたんだけど……」

アリスとライラは一口サイズのおやつが載ったトレイ、メイドさんはたくさんのコップが並んだトレイ、もう一人のメイドさんは大きなガラスのピッチャーを抱えていた。

ピッチャーには淡い黄色の液体と、イルの薄切りが入っている。

イルは前世でいうところのレモン。液体はおそらくレモネードだろう。

俺たちが水遊び場を作っている時、アリスとライラはうきわでの川下りを終えて、何をやっているのかと様子を見に来ていた。

事情を説明すると「手伝う」と言ってくれたが、作業の手は十分に足りたので断ったのだ。

アリスとライラは作業に参加しない代わりに、休憩用のお茶菓子と飲み物を持ってきてくれたんだな。

「ちょっと間に合わなかったわね」

残念そうなアリスに、俺は微笑む。

「ううん、完成祝いにちょうどいいタイミングだったよ。さあ、皆で飲み物やお菓子を一緒にいただこう」

俺はトレイのお菓子を手に取って、作業を手伝ってくれた護衛たちや、傍らに控えていた護衛の人に配っていく。

「フィル殿下。お、恐れ入ります！」

「ありがとうございます。私たちまでいただいてよろしいんですか？」

恐縮する彼らに、俺は笑顔で頷く。

「もちろんだよ。手伝ってもらって助かっちゃった」

カイルは彼らにレモネード入りのコップを渡して言う。

「おかげで早く完成しました。ありがとうございます」

レイやトーマ、アリスとライラもお礼を伝えながら、彼らに飲み物やお菓子を配った。皆で一緒に乾杯して、レモネードを飲む。

意識していなかったけど、作業で喉が渇いていたみたい。

冷たくて甘酸っぱいレモネードが、とても美味しかった。

それは皆同じだったようだ。

全員一気にレモネードを飲み干し、顔を見合せて笑う。

アリスとライラは水遊び場を覗き込んだ。

「素敵な場所ができたわね」

「ここに川の水を引き入れたら使えるの？」

「そうだよ。今、防水布を敷くからちょっと待ってね」

俺は大きめの防水布を手に取り、カイルとレイとトーマと一緒に、完成したばかりの水遊び場に広げた。

この防水布は、水を弾く液体を染み込ませてある特別な布だ。

持ち上げると少し重みがあるが、布の素材は薄くて柔らかい。

階段状の窪みに沿うように、布を調整して敷いていく。

上手くフィットさせたら、石で堰止めていた川の水を引き入れた。

石組みの上部に作った排水口から、余分な水が流れ出る仕組みになっている。

それが上手く機能しているのを確認して、俺は笑みを浮かべた。

「完璧だね」

「じゃあ、休憩もしたことだし、ロイとフラムを喚ぶか！」

レイが召喚獣のロイとフラムを喚び出した。

それに続き、アリスはノトス、ライラはナツシュ、トーマはメアリーと、それぞれの召喚獣を召喚する。

レイ以外は自身の召喚獣のうち、水遊びをする子だけを喚ぶことにしたらしい。

俺は水遊びをするホタルとザクロとコハク以外に、コクヨウや袋鼠のテナガ、ダンデラオーのランドウやウオルガーのルリを召喚した。

こちらの様子に気がついたレイが、フラムとロイを両腕に抱えて聞く。

「フィルも俺と同じく、水遊びに参加しないメンバーを召喚したんだな」

「うん。テナガとランドウとルリは、水遊びだけなら好きだからね」

テナガとランドウとルリは、水に浸かる行為がちよっと苦手だ。

おそらく野生だった頃に、水に入る習慣がなかったせいだろう。

最初はお風呂も怖々だったもんなあ。

今はお風呂で洗われるのを楽しんでくれるようになったけど、テナガたちが湯船に入るのはたまにだ。

でも、水遊びはきつと喜ぶと思うんだよね。

現にホタルだけでなく、テングたちも水遊び場を興味深そうに覗き込んでいる。レイは俺の説明に納得しつつ、チラッとこちらの足下を見る。

そこには、退屈そうにあくびをしているコクヨウがいた。

「コクヨウは水遊びに興味がなさそうだけど……」

俺の召喚獣の中で、コクヨウは最も水に濡れるのが嫌いな子だ。

お風呂も拒否するから、特製のドライシャンプーで毛並みを綺麗にしているんだよね。

多分、コクヨウは属性能力が強いから、その分、濡れるのに抵抗があるんじゃないのかなあ。

コクヨウは伝承の獣、ディアロスだ。火・風・鋼など、いくつかの属性で最上位の力を持っている。

下位の子だつて属性によっては水を嫌がるんだから、最上位のコクヨウはもっと嫌なんだと思う。「平気なのか？」

レイの質問は、『水遊びに興味なさそうなのに、コクヨウを喚んで良かったのか』つて意味だろう。

「水遊びの雰囲気と一緒に楽しんでもらいたくてね。それに、あと少しでお昼だから」

俺がそう答えると、コクヨウは「フン」と鼻を鳴らした。

【我は昼メシまで寝ているからな】

コクヨウは水遊び場の横にある大岩に登り、クルリと一回転して眠る姿勢をとる。

大岩の横には木があり、ちょうどいい木陰を作っていた。

やっぱり、参加はしてくれないか。

まあ、いいか。あの位置なら水もかからないし、水遊びをしている俺たちも見えるしね。

仕方ないと俺が肩をすくめていると、水遊び場を見ていたホタルがこちらを振り返った。

【フィルさま、ここつて何するんです？】

尋ねるホタルの横に行き、俺は答える。

「ここは水遊び場だよ。川の水を引き入れて、ホタルたちが水浴びできる場所を、皆で作ったんだ」

ホタルは目をまん丸にした。

【この水遊び場を、フィルさまたちが作ったんですか？】

俺はにっこりと笑い、「うんうん」と頷く。

トーマはメアリーに向かって、優しい眼差しを向ける。

「フィルの発案だけど、僕もちょっとだけ手伝ったんだよ。メアリーは暑いのが苦手でしょ？ 喜んでくれるかなあって思いながら、作業したんだ」

それを聞いて、メアリーはトーマにしがみついた。

【ええ!? トーマ様がつ!? 運動が苦手なトーマ様がつ!? この私のために、水遊び場をつ!? しかも、私のことを想いながら作業してくださったなんて!】

メアリーは「キューー! キューー!」と大きな声で鳴いている。興奮しているのか、「フンフン」と鼻息も荒い。

俺と違って動物の言葉がわからないトーマは、少し不安そうな顔をした。
「喜んでくれる……んだよね？」

「う、うん。すごく喜んでる」

それも尋常じゃないほどに。

その様子からは、メアリーのトーマへの愛の深さが伝わってくる。

【喜んでおられます！ もちろんですわ！ でも、できることならトーマ様が作業なさるお姿を見たかったですわ！ この目にジュツと、焼きつけたかったですわあ！】

オコジョのような細長い体で身をくねらせるメアリーを見て、ナツシユは呟く。

【ジュツと焼きつける……。メアリーの愛は重すぎて、時々怖いわあ！】
すっかりドン引いている。

俺は一つ咳払いをして気を取り直し、ザクロたちに向かって説明する。

「この水遊び場は、深さが分かれているんだ。一番浅いところはザクロやメアリー、コハクやノトス……体が小さい子用の場所だよ」

そう言って、ザクロとコハクを中に入れた。

コハクは若干浮いてしまったが、ザクロは四つ足の状態でちょうど顔を出せる深さだ。

コハクは楽しみに「ピヨピヨ」と翼をバタつかせる。

可愛らしいなと思っていると、その隣でザクロがおじさんみたいな声を上げた。

【クウーッ！ こりゃあ、いいねえっ！ 深さもピツタリでえ！】

江戸っ子口調だからだろうか、余計におじさん感が増しているなあ。

側面に網付きの排水口を設けているので、川から新しく引き入れた水や、体積で増えた余分な水は流れ落ちる仕組みになっている。そのおかげで、水の高さが一定に保てるのだ。

トーマとアリスも、メアリーとノトスを水遊び場へ入れる。

興奮しすぎてくったりしていたメアリーは、水に入った途端シャッキリした。

【冷たくて気持ちがいいです！】

その言葉に、ノトスが同意する。

【ええ、川の水だからでしょうか。素晴らしい水遊び場ですね】

ノトスは翼を動かしてパチャパチャと水を浴び、ついた水滴を頭を振って落とす。

ノトスが動かした際に、あたりに甘く爽やかな柑橘系の香りが広がった。

香鳥は敵から逃げる時や癒やされたい時など、場面に応じて様々な匂いを作り出す能力を持っている。

だけど、時にノトスの感情の変化が香りに現れることがあると、以前アリスが言っていた。

今のこの香りは、意識的に作ったわけじゃなくて、ノトスの嬉しい気持ちが溢れ出したものなの

かな。

嗅いでいると、なんだか楽しい気分になる。

「ノトスが気に入ってくれたみたいで良かったわ」

アリスは水遊びをするノトスに目を細める。

ホタルとナツシユは水浴びするノトスたちを羨ましそうに見ていた。

【楽しそうです】

【ええなあ。冷たそうで】

俺はそんな二匹を、くすつと笑う。

「真ん中の少し深くなっている場所は、ホタルとナツシユが入るところだよ。入れてあげるね」

「ナツシユも遊んでらっしゃい」

俺とライラはホタルとナツシユを抱えて水遊び場の中に入れた。

浮力のあるホタルはプッカリ浮いてしまったが、ナツシユは二本足で立つとお腹まで浸かるくらいに深さだ。

「ちようどいいわね」

笑顔のライラを見上げ、ナツシユは満足そうだ。

【お嬢！ ここ、最高やわ！】

【フィルさま、とっても気持ちいいです〜！】

言いながら、ホタルは短い足を動かして泳いでいる。

その時、ふとナツシユが隣のスペースに気がついた。

【坊、こっちのもっと深い場所は誰が入るん？】

聞かれた俺は、自分を指した。

「一番深いところは、僕らが入るんだよ」

そう言うと、ホタルたちは【えー!!】と驚く。

【フィルさまも一緒に入りますか？】

目を輝かせてホタルが聞く。

【皆で水遊びしようね】

俺が微笑むと、ホタルは長い尻尾を振りながら元気に返事をする。

【はい！ 一緒に水遊びします！】

【みずあそび！ フィルといっしょ！】

コハクは嬉しそうにパチャパチャ水面を叩き、ザクロがしみじみと呟く。

【フィル様と一緒に入るのは、久しぶりですねえ】

言われてみたら、確かに久しぶりか。

ホタルたちのお風呂には召喚獣専用の湯船を使うので、俺が入ることはない。

最後に一緒に入ったのは、ドルガド王国の森の中にある温泉に行った時だ。

こんなに喜ぶなら、皆と入る機会をもっと作るべきだったかな。

すると、水浴び場の縁にいたランドウとテンガとルリが、ホタルたちを見つめて【う〜ん】と考

え込んだ。

自分も一緒に入るべきか、迷っているようだ。

俺は小さく笑って、ランドウたちの頭を撫でる。

「大丈夫。ランドウたちが遊べる場所も作ってあるから」

立ち読みサンプル
はここまで

【遊べる場所？】

見上げるランドウたちに、カイルが水遊び場の奥を指さす。

「あそこに作ったから、見てみる」

そこには砂利を敷き詰めたスペースがあった。

この砂利は、水遊び場の底を掘り下げた時に出たものだ。

そしてこのスペースには、水遊び場から川に向かって、浅い溝みぞを掘ってある。

排水口から出た余分な水を元の川へ戻すための溝だが、これにはもう一つ役割があった。

「ここに葉っぱの舟ふねを浮かべて、流す遊びができるんだよ」

俺は作っておいいた葉っぱの舟を持ってきて、溝の水に浮かべる。

小さな葉の舟は、ゆらゆらと揺れながら動き始めた。

ランドウやテンガが溝に駆け寄ってその動きを追う。

【うおお！ 動いたあ！】

【すごいっす！】

溝はくねくねと蛇行だてうしていた。

さらに、ところどころにちよっとした障害物や段差などを設けている。

それもあって、葉の舟は引つかかったり、ひっくり返りそうになったり。

その動きが舟を見守る者にスリルを与える。

【葉っぱの舟、初めて見ました】

ルリは俺の肩に乗り、ワクワクした声で言う。

「たくさん葉っぱの舟を作ったからね。競争してみても楽しいと思うよ」

レイはロイに向かってニツと笑う。

「フィルが水に濡れない遊びを考えてくれたんだぞ。ロイもこれなら一緒に遊べるだろ？」

ロイは嬉しそうに、「キキッ」と鳴いた。

それからフラムにも顔を向ける。

「フラムが楽しめる場所もあるぞ。この水鏡だ！」

そうして彼が指し示したのは、端っこのほうにある小さな水溜まり……あ、いや、極小の池。

とても小さいけれど、底に白い防水布を敷いているのでちゃんと姿が映る。

【おお！】

フラムが水面を覗き込んで、感嘆の声を漏らす。

レイは少し得意げに続けた。

「いいだろ？ 水遊び場や川は、皆が入ると水面が揺れるからな。フラム用に特別に作ったんだぞ」

「レイがフラムのために一人で作ったんだよ」

俺がそう囁くと、フラムは尻尾をブンブンと揺らしてレイを見上げた。

【さすがリーダーだ！ 僕の求めているものをわかっているな！】

揺れる尻尾で満足しているのを感じ取ったのか、レイは嬉しそうに鼻を擦こすった。